

胸部外科創立当時の思い出

藤 田 眞 之 助

日本胸部外科学会の創立は雑誌「胸部外科」の創刊と同じ年の昭和23年である。戦前から結核に興味を持ち、東大内科で盛んに人工気胸療法を行っていた私は、内科医ながら肺結核の治療の完遂にはつとに外科療法の必要性を感じていた。幸いに以前から個人的に知遇を得ていた都築教授のご厚意で、都築外科にちょいちょい出入りして、受持だった患者の胸成術を見学したり、横隔神経麻痺術を教えていただいたり、木本助教授から胸膜癒着焼灼術の手ほどきを受けたり、卜部講師と一緒に空洞吸引術を試みたりしたのであるが、戦後間もなく象牙の塔を出て、現在の病院に移り結核科を開設した。

たまたま昭和23年春胸部外科研究会創立の話がまとまり、その第1回が東大で開かれることになった。福田教授が準備委員長となり、宮本、卜部両博士と、内科から北本助教授と私が幹事として開会の準備にあたり、いよいよ11月3日午前8時半、東大医学部内科講堂で福田先生司会のもとに開会された。この講堂はよく内科の臨床講義に用いられた小さな階段教室で、私たち内科医局員が長く親しんだ処である。

初め名称を肺外科研究会としようということであったが、前日の本郷。文化会館での世話会会で、範囲を広げて胸部外科とすることに決まった。これはその後の学会の進展をみると先見の明があったことになる。

午後の講演に先立って会則が参会者一同によって可決され、第1回会長に大槻先生が推された。この会則は12条にわたる簡単なもので（胸部外科1巻2号）、（本誌75頁参照）、役員は会長1名、評議員および幹事はそれぞれ若干名とされ、会長は会員多数の推薦により、評議員および幹事は共に会長の委嘱によって定められるとある。会費は年100円というものも今昔の感に堪えない。

演題は初めてのことであり、準備期間も少なかったせいも、特別講演もシンポジウムもなく、一般講演が23題だけであった。テーマとしては、胸成術のほか、長石助教授らによって考案された胸膜外合成樹脂充填術やそのころ行われ出した肺葉切除術など、肺結核を対象とする研究報告が主であった。肺切除については当時わが国では黎明期で、それだけに少数例の報告ながら、その適応と手技について熱心に討議が行われた。

当日相い会する者約250名、夕刻5時盛會裡に閉会されたが、胸部外科研究の夜明けというべき記念すべき集まりであった。

第2回には研究会を学会と改称して、翌昭和24年10月京都において青柳会長のもとに行われた。会期も2日、特別講演3題のほかに一般講演も76題に達した。第3回（千葉、河合会長）には一般講演が追加および共同研究を含めて117題、第4回（大阪、小沢会長）には111題、映画供覧もあり、第5回（仙台、武藤会長）には143題と数を増している。その内容も肺切除の研究が増し、第3回には大血管手術の実験的研究と食道の手術報告が初めて登場した。その後気管支や肺に比して心臓、血管手術や麻酔に関する報告が次第に増加し、最近では心臓・血管が専ら主役を演じている。

私たちは第1回には両側気胸のさいの縦隔（洞）ヘルニアの症例を報告したが、その後胸膜癒着焼灼の問題や、人工気胸、胸成術などによる縦隔動揺の問題などを発表した。その後も毎回出題

し、また発言もさせていただいたが、初めの頃学会にさいして催された胸部外科をめぐる座談会では、大いに楽しみながら勉強させていただいたのも懐かしい思い出である。

なお私は初めから評議員の席を汚してきたが、去る49年香月会長のときの総会で特別会員に推薦された。胸部外科に関心を持っている内科医としてまことに光栄の至りである。この創立30周年を契機として日本胸部外科学会のみますますの発展を祈って止まない。

(東京通信病院々長)